

子どもたちが 人・もの・こと とのかかわりを広げていくための新聞活用

指定校 2 年次 東御市立和小学校 油井 玲子 中村 大輝

I 研究のテーマと方向

指定校 1 年次の昨年度は、各教科での新聞活用について、「新聞で学ぶ」「新聞を学ぶ」「新聞を作る」の 3 場面での具体的な手立てについて研究を進めた。主に課題解決学習での実践を積み、子どもたちの具体の姿から“新聞だからこその成果”が見えてきた。

中でも、6 年総合的な学習の時間「古着回収を通した難民支援」の実践では、新聞記事から子どもたちは、自分たちの活動が今まさに起きている世界の問題に直結していることを知り、その記事が活動の原動力となった。

新聞の活用により、子どもたちはこれまで目を向けることがなかった人・もの・ことに会い、課題解決学習をより充実させていったという成果が見られた一方で、本校児童の新聞とのかかわりについての課題が浮き彫りとなった。日常的に新聞を手にする児童は限られていて、漢字・言葉の難しさや文字の多さから、苦手なイメージを持つ児童が多かった。

そこで 2 年次は、課題解決の過程における新聞の活用という昨年度の方向を踏襲しつつ、子どもたちがより興味関心や必要感を持って新聞にかかわるための手立てに焦点を当て、全校の研究テーマである「自分たちの取り組みに達成感を持てる学習」に向けて実践を積んだ。

II 研究の内容

1 授業を構想する上での手立て

＊ 授業終末の姿を具体化するために、東信教育事務所提案の授業構想シートを用いて指導案を作成した。

A 新聞で学ぶ（読んで使う新聞記事活用）場面で

- ① 子どもたちの意識にそった、必要感のある記事を選ぶ。
- ② 子どもたちの心を揺さぶり、友との対話を誘起する記事を選ぶ。
- ③ 子どもたちが考えを広げたり深めたりするきっかけになるような、同じ事柄を異なる視点で捉えた記事を選ぶ。
- ④ 子どもたちの実態に合わせ、着目すべき点に意識が向くような提示の仕方を工夫する。

B 新聞を学ぶ（知って考える新聞記事機能活用）場面で

必要に応じて情報収集の手段を選択できるように、

- ① 新聞のよさ（信頼度が高い・手元に保存できる・読み手のニーズに合わせている・定期的に発行される など）を取り上げる。
- ② 他のメディアとの比較、新聞同士の比較（同新聞社の異なる日・異なる地域、同日の異なる新聞社等）から気づきを促す学習場面を設定する。
- ③ 新聞コーナーを継続して設ける。

C 新聞を作る（作り発信する新聞製作）場面で

- ① 相手意識、目的意識を明確にし、取材対象や読み手との交流を図る。
- ② 新聞本来の機能を正しく学べるよう、実際に新聞作りに携わる方から 取材・記事作成・構成・レイアウトを学ぶ場を設定する。

2 環境づくり

① 新聞コーナー

- ・毎日の新聞を自由に読めるようにする。
- ・子どもたちの取り組みを紹介する。

② 各教室や廊下での展示・保管

- ・調べ学習基地となる図書館へ、新聞を展示・保管する。
- ・教室での取り組み等を取り上げて、廊下等へ掲示する。

Ⅲ 研究授業

4年 総合的な学習の時間「2分の1成人式を成功させよう ～「自分史」を作ろう～」

1 単元のねらい

- ・これまでの、家族や友だち、さまざまな人との出会いやかかわりをふり返り、自分の成長が多くの人に支えられていることを実感し、そのつながりを大切にしようとする気持ちをもつ。
- ・生い立ちや成長の過程を「自分史」としてまとめ、発表し交流することを通して、自分を見つめ自己のとらえ直しをする。

2 単元展開

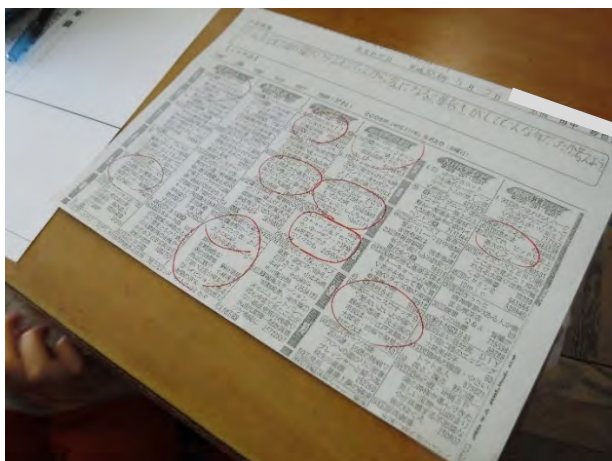
内容	予想される児童の反応・意識の流れ	※留意点・NIEとの関連
計画を立てよう	・ 私たちも「2分の1成人式」を開いてみたいな。 ・ おうちの方を招待しよう。 ・ これまでの10年間をふり返って発表しよう。(自分史) ・ 歌でありがとうの気持ちを伝えよう。	・ 信毎 2001 年 2 月 4 日 「1 / 2 成人式」
「自分史」を作ろう	・ 自分たちが生まれた年って、どんな年だったのかな？ ・ 生まれた日のテレビ欄と今（10年後）のテレビ欄を比べ、変わったこと、続いていることを知ろう。 ・ 生まれた日のことや、これまでの自分にとってのニュースを、家族にインタビューしよう。 ・ 小さい頃にそんなことがあったなんて初めて知った。 ・ 病気やケガのたびにたくさん心配してもらったな。 ・ 学んだことを「自分史」としてまとめよう。	・ 生まれた日の紙面 ・ 今週の紙面 ※事前に学年だよりで家庭へ協力を依頼し、載せたくない内容はふれなくてよいことを確認する。 ・ 信毎 2012 年 12 月 31 日 きりり「自分史で人生を前向きに」
歌を決めよう	・ 自分の気持ちに、歌詞がぴったり合う曲を探そう。 ・ おうちの方に気持ちが伝わるように、練習しよう。	
会場作りをしよう	・ イスはいくつ必要かな？飾り付けも工夫しよう。 ・ スクリーンに4年生の活動写真を写すのはどうかな。	
練習をしよう	・ 進行も自分たちで役割分担をしよう。 ・ 声の大きさや表情など、しっかり伝わっているかな。	
2分の1成人式本番	・ おうちの方や友だちに「ありがとう」の気持ちが伝えられてよかったな。 ・ この活動を通して、自分に自信がもてた気がするな。 ・ これから先、自分と周りの人たちを大切にしていきたい。	

3 本時 (手立てA-① ② ④)

ねらい	2分の1成人式に向けて「自分史」を作ろうと計画している子どもたちが、自分が生まれた日の新聞のテレビ欄から気になったニュースやイベント、アニメ、番組などを見つけることを通して、自分が生まれた年がどんな年だったのかを考えることができる。
本時の展開	学習問題 : わたしたちが生まれた10年前は、どんな年だったのだろう。 導入 : 先生の誕生日の新聞を見て、テレビ欄には今の話題や流行などの情報が詰まっていることを確認しよう。 学習課題 : 誕生日の新聞のテレビ欄から、気になる言葉(ニュース・イベントなど)を探し、生まれた年の大きな出来事や、はやったことがなんだったのか考えてみよう。 学習活動①: 自分の誕生日の新聞のテレビ欄から気になる言葉を探して、みんなで見合おう。 学習活動②: 友だちとカードを見合い、私たちが生まれた年はどんな年だったのか考えよう。 振り返り : わかったことや感想を発表しよう。

4 本時の子どもたちの姿から (○成果と●課題)

- 新聞を読むことに抵抗感があり難しいと感じている子どもたちが、番組表(テレビ欄)に夢中で見入る姿が見られた。見つけた言葉について友だちと盛んに紹介し合ったり、読めない漢字を自分から教師に質問したりと、時間いっぱい活動に取り組んだ。
- 「10年前からこの番組は続いているんだ…」「テレビ欄っておもしろい!」というつぶやきが多数聞かれた。
- 特に気になったキーワードを、迷いながらも楽しんで選んでいた。
- 五輪、WBC、米大統領選挙など、個別に見つけた10年前の象徴的な出来事につながるキーワードを、友だち同士で共有できた。
- 「このニュースについて、もっと詳しく知りたい。」「家族にこのテレビ欄を見せて話を聞いてみたい。」という、今後の活動につながる感想をもつ児童がいた。
- ニュースの枠から出来事を選ぶべき場面で、ニュース番組名のみを学習カードに書き込む子どもたちがいた。
- 友だちと協力して取り組む必要感を、十分持たせることができなかった。
- 各々がキーワードを書いた学習カードを自由に見合う時間が、更に確保できると良かった。



学習カード① (誕生日の番組表)



学習カード② (キーワードを3つ書いた短冊)

5 授業後の様子

- ・誕生日の番組表が載った学習カードを持ち帰り、生まれた日のことを家族にインタビューし、自分史づくりがスタートした。
- ・2分の1成人式では、自分史にまとめたことを一人ひとりが発表した。

6 考察

- ・本時を「自分史を作る」という学習活動の一環として単元展開に組み込んだことで、新聞を扱う活動が子どもたちにとって意味のある学習として位置づいた。また、誕生日の番組表を取り上げたことにより、子どもたちはニュースだけでなく当時の流行などについても知ることができた。本実践から、番組表はその時代を映すものであることが見えてきた。学習材として更なる活用が期待できる。
- ・新聞にかかわる子どもたちの実態にそって番組表を取り上げ、その中でも時間帯を夕方から夜に絞り、局も限定したことで、情報量が適度に調整され、どの子も意欲的に活動に取り組むことができた。ただ、取り上げたキーワードが番組名にとどまっていたのは、番組表からその年の様子を知ることはできない。授業後に持ち帰った学習カード（誕生日の番組表）の扱いが各家庭にゆだねられたことから、活用には差が見られた。より効果的な新聞活用のためには、更なる工夫が必要である。
- ・学習問題を「生まれた年がどんな年だったか」とし、クラス全員で学習カードを誕生日順に並べたことで、子どもたち一人ひとりが集めた情報が学級全体で共有された。本時は互いの学習カードを紹介し合う時間が十分に取れなかったが、並べて気づいたことを話し合う活動を充実させることで、誕生日の番組表は子どもたちにとってより価値のあるものになり、その後の活動への強い原動力になり得たと考えている。

IV その他の実践

1 『大豆新聞』を作ろう（2年 生活科）

① 本時（手立てC-① 事前にC-②）

ねらい	お世話になった地域の“大豆の先生”に感謝の気持ちを伝えるために、大豆新聞を作ろうと計画している子どもたちが、子ども新聞から見つけた「分かりやすくするための工夫」や構成メモをまとめた「大豆新聞計画カード」を手がかりに、書きたいことをこれまでの記録から選び、新聞記事を書くことができる。
本時の展開	学習問題 : 大豆新聞を作ろう。 導入 : 「子ども新聞」を読んで、どんな工夫があったか、ヒントカードを見て思い出そう。 学習活動① : めあてを発表し合い、自分のやりたいことをはっきりさせよう。 学習課題 : 子ども新聞の工夫を取り入れた、大豆新聞計画カードを使って、大豆の先生が喜んでくれるような、もっと工夫した分かりやすい大豆新聞を作ろう。 学習活動② : 新聞記事を書こう。 学習活動③ : 友だちと新聞を見合おう。よさを伝え合おう。 振り返り : 今日の学習を振り返り、感想を発表し合おう。

② 考察（○成果と●課題）

- 信毎の出前講座で、新聞作りの進め方を教えていただいたことと、「大豆の先生のお礼の会」に向けて「大豆新聞をつくりたい」という児童の願いがつながり、子どもたちは新聞作りに意欲的に取り組めた。
- 「大豆の先生に喜んでもらえるような新聞づくりをしたい。」
「ありがとうの気持ちのメッセージを伝えたい。」という気持ちが高まった段階で、「子ども新聞の分かりやすさのひみつを見つけよう。」の学習をしたことで、子どもたちは新聞を「工夫したい」「分かりやすくしたい」という具体的な願いを持ち、大豆新聞計画カード（構成メモ）の内容が充実した。
- 「大豆新聞」を作ることで、子どもたちは大豆にかかわって活動したことを振り返り、感謝の気持ちをより強く持ち、お礼の会に向けた活動に意欲的に取り組むことができた。
- 班での話し合いの時に、書く内容などで困っている子どもたちが、周囲の友だちに相談をするきっかけづくりになるような場の工夫ができるとよかった。
- 一人ひとりの書きたい文章量が異なるため、中には新聞のマス目が細かすぎる児童がいた。マス目の大きさを個々に選べるようにするとよかった。



③ 授業のその後



2 学年全体で「大豆の先生 感謝の会」を計画したところ、17 名もの大豆の先生が来てくださった。子どもたちは、育てた大豆からできた味噌を使った味噌汁を作り、ふるまった。

会場には『大豆新聞』を飾り、また、大豆の先生お一人ずつに新聞をプレゼントした。『大豆新聞』を手にした大豆の先生方は大変喜んでくださり、2 年生の子どもたちにとって思い出に残る会となった。

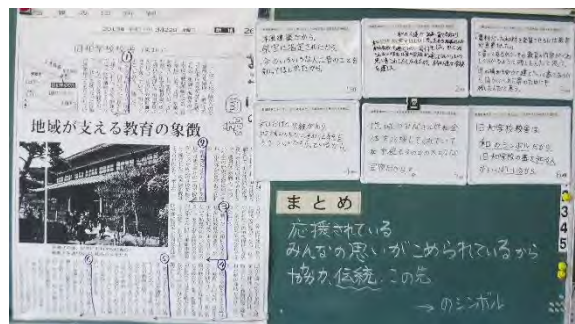
2 『和記念館のナゾを探ろう ～新聞記事から知る私たちの宝～』（5 年 総合）

① 本時（手立て A-① ② ③ ④）

ねらい	旧和学校の校舎や展示品がなぜ残されているのか 疑問を持っている子どもたちが、新聞記事から建物の価値や開校の経緯を読み取り、和村民の思いや願いについて友だちと話し合うことを通して、旧和学校は地域の宝であることが分かり、和記念館への関心を更に高めることができる。
本時の展開	導入 : 市内の他の小学校にも、開校当時の校舎が残されているのか確かめよう。 学習問題 : 「旧和学校」は、なぜ残されたのだろう。 学習活動① : 「旧和学校」を取り上げた新聞記事を読もう。(信毎 2013 年 3 月 22 日) 学習課題 : 新聞記事のキーワードに自分や友だちの考えを付け足して理由を考えよう。 学習活動② : 班ごとに新聞記事からキーワードを探し、話し合おう。 学習活動③ : 各班の読み取りを発表し合い、「旧和学校」が残された理由を考えよう。 振り返り : 今日の学習を通してわかったこと、感じたこと、更に考えたいことを発表し合おう。

② 考察（○成果と●課題）

○ 子どもたちが最高学年である6年生になる来年度、和小学校は開校140周年を迎える。旧和学校である和記念館は、地域が学校を支える「和教育」の象徴とされているが、子どもたちの和記念館への意識はさほど高くない。新聞記事からの情報を、自分が持ち合わせている情報と結びつけて考える学習が、和記念館そのものや、そこに保管されている物の価値、そして当時の村民の思いに目を向けることにつながった。



- 班ごとに段落を分担して記事を読んだことで、難しい言葉について調べたり、その解釈について相談したりすることができ、ただ文字を追って読むだけでなく、書かれていることの意味についても深く考えようとする様子が見られた。
- 分担した段落について発表する場面では、班の読みが学級全体の読みにつながることから、聞き手にも必要感が生まれ、その発表から、学習問題に対する答えを各々が考えることができた。
- 『旧和学校は「和教育」の象徴である。』という、最も鍵になる文を担当した班が、「象徴」の言葉の意味を辞書で調べたが、授業者がねらうようなイメージを持つことが難しかった。
- 他の班の発表を聞き合う中で、誤った方向に発表を捉えた発言があり、話し合いが混乱した。班ごとに分担して読んでも情報量が多く、また、新聞記事だけで和記念館について理解することは難しい。新聞記事をきっかけに、今後詳しく調べていく必要がある。

③ 授業のその後

和記念館の活動のきっかけとなった「墨塗りの教科書」について、前の時間に扱った新聞記事にお名前のあった大学教授の先生にぜひ直接お話を聞きたいとの声が学級で盛り上がり、実際に学校へ来ていただけることになった。子どもたちは新聞記事を通して、自分たちだけでは成し得なかった出会いを体験し、貴重な学習の機会を得た。「新聞は人と人とをつなぐ」ことを、実感を伴って学ぶことができた。

3 『かたかなの かたち』（1年 国語）

① 本時

ねらい	ひらがなとカタカナを知り、両者の形を比べたり書いたりしてきた子どもたちが、新聞からカタカナの言葉を探して仲間分けをしたり、カタカナを使った文を書いたりする活動を通して、カタカナにはいろいろな種類の言葉があることがわかり、カタカナを使って、文を作ったり書いたりすることができるようになる。
本時の展開	学習問題：カタカナをつかったことばには、どんなものがあるのかな。 学習課題：新聞（しんぶん）をつかって、どんなカタカナのことばがあるのかしらべてみよう。そして、カタカナのことばをつかって、文をつくってみよう。 学習活動①：班で、新聞の記事からカタカナを使った言葉を見つけ、カードに書こう。 学習活動②：班で、カタカナのカードを仲間（グループ）分けすることに挑戦し、気づいたことを発表しよう。 学習活動③：カードに書いたカタカナの言葉を使って文を作り、発表しよう。 振り返り：今日の学習でわかったことを発表しよう。

② 考察（○成果と●課題）

- 子どもたちは新聞に高い興味・関心を持っており、特に自分たちが学んだ文字（ひらがな、カタカナ、漢字）が新聞に使われていることに嬉しさを感じて、学習する姿が見られた。1年生にとっても新聞は有効な教材になり、国語をはじめ他の教科にも活用を図っていくことができる可能性を秘めている。



- 学習問題と関連させて、たくさんのカタカナの言葉から「外国の言葉（言語）がカタカナになっている物が多いこと」に気づかせたかったが、そのための学習活動が十分に確保できなかった。子ども同士のかかわりや話し合いから気付くように、学習の流れを持つようにしていきたい。また、まとめ（評価）の場面では、子どもたちが記述したり、複数の児童がわかったことを発言したりできるような場を設定していきたい。

V 手立てから振り返る本年度の成果と課題（○：成果 ●：課題）

A 新聞で学ぶ（読んで使う新聞記事活用）場面で

- 課題解決学習での子どもたちの意識にそった新聞記事を選び提示したことで、子どもたちは必要感をもって新聞を手にし、単元全体の中で新聞が活動の原動力となった。
- 記事の提示の仕方を工夫することにより、記事や紙面に子どもたち一人ひとりのこだわりが生まれ、個の活動は学級全体へと広がり、友だち同士の交流が活発化した。
- 新聞を通して、学校外の人とのかかわりが生まれ、新たな出会いが実現した。新聞は人と人をつなぐものであることを、子どもたちは実感として学ぶことができた。
- 小学校で扱うには漢字や言葉が難しいことが多いので、提示の仕方をさらに工夫する必要がある。
- 授業者が新聞記事をどう扱うかによって、学習内容は大きく変わる。目指す子どもの姿、その記事を取り上げる目的を明らかにした上で、記事内容の事実を正確に扱うために、更に入念な教材研究が必要である。

B 新聞を学ぶ（知って考える新聞記事機能活用）場面で

- 新聞は世の中の出来事を知ったり、新たな情報を得たりするための手段であるというイメージが強い中、番組表を使った実践や国語での教材化を通して、新聞とはその時代を詰め込んだ記録であることや、扱う側の意図によりいずれの教科でも活用できる学習材になるという新たな側面が見えてきた。これは教師側にとって大きな成果であった。
- 全校児童の目にふれる場所に新聞コーナーを設けたことにより、特定の記事を楽しみに立ち寄る児童が出てきた。
- 新聞コーナーの活用に課題が残る。新聞そのもののよさに目を向けられるよう、児童会など子どもたち自身がかわるコーナー作りも考えていきたい。

C 新聞を作る（作り発信する新聞製作）場面で

- 新聞作りを通して、地域の方とのより深い関わり、新しい関わりが生まれ、地域との結びつきが強い和小学校のよさを生かした学習活動が展開できた。
- 4学級が信毎の出前講座を利用し、学年の発達段階に即した新聞作りを学ぶことができた。構想シートを使い、新聞記事のつくりを専門家から直接学ぶことで、書くことに苦手意識がある子どもたちも文章を構成することへの抵抗が薄れ、筋道の通った文章を書くことができるようになってきた。
- 新聞作り以外の授業でも、構想シートを活用して意見文を書いたり、社会科見学の前に取材メモを使って質問をまとめたりと、出前講座で教えていただいたことが大いに役立った。こうした学習の積み重ねにより、中には構想シートや取材メモがなくても文章や質問を考えることが自然にできるようになる児童もいて、取り組みをくり返すことにより考え方そのものが身についていくことが分かった。
- 誰に向けて何のために書くのかを意識しないまま、新聞の形式にして終わってしまうことがある。新聞の読み方や作りを、正しく学ぶ機会を確実に設けたい。



信毎 新聞作り出前授業の様子



児童会による新聞掲示